

AAR News



特集：生きる力を育む

障がい者の就労支援

AARが運営する障がい者のための訓練校で洋裁に取り組む訓練生たち＝ミャンマー・ヤンゴンで2026年3月9日



©EPA=時事

広がるイラン攻撃の波紋

中東危機緊急支援

レバノンで食料配付を開始

→詳細は p6 へ

AARニュース2026春号

- p1-5 特集：生きる力を育む 障がい者の就労支援
- p6 活動レポート：カンボジア避難民緊急支援 中東危機緊急支援
- p7 活動レポート：ウクライナ難民支援 スタッフ日記：ケニア
- p8-9 インタビュー：矢野 嘉行さん
- p10-11 インフォメーション
- p12 スタッフ紹介：三木 将（支援事業部）



特別インタビュー

矢野 嘉行さん（中外製薬上席執行役員）

「未来を変える薬と
誰もが健康な社会を作る」

→ p 8-9



AAR Japan

認定NPO法人 難民を助ける会

生きる力を育む 障がい者の就労支援

世界では多くの人々、特に就労する機会に乏しい障がいのある方々が、貧困に苦しんでいます。就労は安定した生活をもたらすだけでなく、自尊心の回復や社会とのつながりの強化になります。そして、地域社会への貢献は、差別意識を減少させます。

AARはミャンマー、タジキスタンなど世界各地で、障がいのある方々やその家族への就労支援を行っています。その一部を現地からご報告します。

全寮制で3カ月半 卒業生の9割 就労に成功

「あなたの強みは何ですか？」

午前8時30分、

授業の前に行われる朝の講話の時間。講師の問いかけに、若者たちが照れながら手を挙げます。少し緊張感が漂う教室にやがてリラックスした笑顔が広がっていきます。

AARが2000年からミャンマーの最大都市・ヤンゴンで運営する障がい者のための職業訓練校(VTC)。現在49

人が理容美容、洋裁、コンピューターの各コースで学んでいます。この学校の大きな特徴は3カ月半にわたる寮生活です。全国から集った若者たちは、寝食をともにしながら専門技術だけでなく、社会で働き続けるために必要な協調性や自己表現の力を育んでいきます。

ミャンマーに根強く残る障がい者に対する偏見や差別から、家にこもりがちで、家族以外とのコミュニケーションに慣れていない若者も少なくありません。



就職後を想定した実践的な知識・スキルを身に付けるためのワークショップで、お客さんとのトラブルの解決方法を話し合う訓練生＝2026年3月12日

寮に個室はなく、食事は当番制。最初は緊張でガチガチだった訓練生が、共同生活を通じて少しずつ心を開き、励まし合う仲間へと変わっていく姿は、何よりの成長の証です。

昨年の8月に理容美容コースを卒業したミョーサンダータウンさんは、バイクの事故で歩行障がいがあります。「癌で右脚を切断した弟がVTCの卒業生で、彼の勧めで入学しました。寮生活はとっても楽しかった。故郷に帰って弟と一緒にヘアースalonを開きたい。そしていつかヤンゴンにも進出したい」と、大きな夢を抱いて巣立っていきました。25年間で2080名が訓練を受け、近年では、その8〜9割が就職や開業などの何らかの形で就労を果たしています。



訓練中のミョーサンダータウンさん(左)=2025年5月

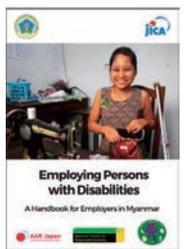
卒業後もサポートを継続

AARの取り組みは、職業訓練にとどまりません。17年からは、障がい者雇用の促進に力を入れています。

ヤンゴン事務所の職員が卒業生が勤める企業を訪問し、雇用主との間に立つ「調整役」となり、職場で生じる小さなつまづきを早期に解決し、離職を防ぎました。例えば、障がいのある同僚の退職をきっかけに不安を抱えた卒業生には、職員が面談を重ねて気持ちを整理し、働き続ける自信を取り戻す手助けをしました。また、障がいの特徴に適合しないイスで業務に支障が出ていた卒業生には、企業と協議のうえ適切なクッションを提供し、環境を整えました。企業側にとつても、合理的配慮の具体例を学ぶ機会となり、障がい者雇用への理解が着実に広がりました。

さらに18年には、障がい者の権利に関する法律や適切なコミュニケーション方法、合理的配慮の事例などを掲載した「障がい者雇用ハンドブック」を障がい者支援団体と共同で制作。現在も支援団体のHPからダウンロードができ、24年10月公開の改訂版は、約1年4カ月で1万回以上ダウンロードされています。

20年の新型コロナウイルス感染拡大により、訓練校は2年半にわたり休校を



2018年に制作したミャンマー初の「障がい者雇用ハンドブック」

余儀なくされました。その間も卒業生へのビデオ教材の配信や電話、SNSを通じた個別技術指導を続けたほか、困窮する卒業生には食料や日用品を提供しました。現在も、卒業生がさらに技術を磨くためのコースを開講したり、就職の斡旋も行ったりしているほか、ミャンマー国内企業を訪問し、雇用促進のための啓発活動を続けています。卒業直後に就職が決まっていなくても、職員が卒業生一人ひとりの多様な個性に合った働き方を共に探していきます。その結果、23年度には、89%が、24年度は90%の卒業生が、それぞれに適した形で仕事に就くことができています。

03年よりヤンゴン事務所で働く所長のワーワーは、「美容サロンや洋裁店を経営して雇用主となった卒業生もいますが、全員が社会的に成功するわけはありません。でも、家を離れて訓練校で学ぶことで、本人が自立して生きていく勇氣と自信を得られるのです。支援がその人の人生の希望につながるよう、できる限りの力を尽くしていきたいです」と話します。



ヤンゴン事務所長のワーワー(右端)と職員たち=2026年3月9日

21年2月の政変後ミャンマーでは内戦が続ぎ、昨年3月には大地震に見舞われました。困難な社会状況の中でも、若者たちは一步を踏み出しています。AARはこれからも、一人ひとりの可能性に寄り添い、働く喜びと自立への道をとともに築いていきます。

ヤンゴン事務所
今井由紀子



特集でご報告するミャンマー、タジキスタンでの活動は、「まるごとプロジェクト募金」によっても支えられています。詳細は同封チラシまたはAARのHPをご覧ください。



タジキスタン 2

Tajikistan

人生を変える縫製研修 女性たちの挑戦を後押し



縫い方を確認し、服作りに励む女性たち＝シャフリナブ市での縫製研修で2026年2月26日

中央アジアの内陸国、タジキスタンは、人口約1080万人の農業国です。1人当たりの年間GDPは1000ドル台と決して豊かではありません。国連の障害者権利条約は192カ国で批准されていますが、タジキスタンはまだ批准していません。障がい者への差別や偏見は強く、特に女性は厳しい状況におかれています。

「AARの縫製研修に参加して、私の人生は大きく変わりました。特に幸せを感じたのは、研修に行く途中で多くの人や車を目にしたこと。それまで家を出ることはほとんどなく、そうした光景を見るのは初めて。まるで新しい世界に足を踏み入れたようでした」

目を輝かせて語るのは、歩行に軽い障がいがあり、2025年の縫製研修に参加したフォティマさん。AARは20年以上前からタジキスタンで障がい者支援を続け、2010年からは障がいのある女性や障がい児を育てる女性の自立を目標に、縫製研修を定期的で開催し



上) 歩行に困難があるズライホさん。ミシンの使い方をあっと言う間に覚えました
中) 完成した服を手にするフォティマさん
下) 出来上がった服の街頭販売会＝いずれもバフダット市で2025年

ています。25年度は、首都ドゥシャンベ近郊のシャフリナブ市、バフダット市、ヒツサル市で計87人が受講しました。

完成品の販売会も

研修は1回3時間で週3回、6カ月間続きます。採寸、型紙作り、布の裁断、ミシンでの縫製を学び、数着のワンピースとズボンを完成させます。最後は完成品を自分たちで街頭販売します。

当初は、はさみやミシンをこわごわ触っていた彼女たちが、何度も失敗しながら励まし合い、最後は自信に満ちた笑顔でミシンを使いこなす姿には胸を打つものがあります。研修後、実際に縫製の仕事に就く女性も多数います。

参加者が得るのは、収入をもたらす技術だけではなく、収入をもちながら自分のように家にこもる障がい者女性が多く、教室に通うために外に出て、仲間

と出会うのは大きな変化です。彼女は「これまで姪にプレゼントをすることもできなかった私が、今では何種類ものドレスを作つてあげられる。信じられないぐらいうれしくて、泣いてしまいました」と話します。街頭販売会では500ソモニ(庶民的な屋食代金約20ソモニの40倍相当。日本円で約8000円)を売上げて小躍りして喜んでいました。

縫製研修には課題もあります。家にも障がい者を見つけず参加を呼びかけることの難しさや、夫や父親の反対により途中で参加を断念せざるを得ない女性がいることです。26年度にはシャフリナブ市で研修を続けるだけでなく、ミシンを自由に使える部屋を用意するなどして、研修後も女性たちを支えることを検討しています。

ドゥシャンベ事務所

高島公美



「自分も働きたい」
職業訓練校の受け入れ体制支援



ミシンの練習を始めたスレイリエップさん
(左) = 2025年10月

カンボジアは近年、着実な経済成長を続けています。生産年齢人口に占める就労者の割合は84%と高い一方、障がい者の雇用割合はわずか0.5%程度にとどまっています。

AARは92年からカンボジアで活動を開始し、車いすの製造・配付やインクルーシブ教育の推進など、障がいのある人々が地域で自分らしく生きられるよう支援してきました。

24年から取り組んでいるのが、首都プノンペン近郊のカンダール州

にある職業訓練校との共同事業です。それまで受け入れが難しかった障がい者も訓練を受けられるよう、校内のバリアフリー化やミシン・美容器材の提供のほか、職員向けの障がい理解研修、障がい者を雇用する企業の見学会も実施しています。

25年1月に入校した聴覚障がいのあるスレイリエップさんは、当初は教室の隅で恥ずかしがっていたが、徐々に織り機の操作を覚え、複雑な柄の布を織り上げるほどの技術を身に付けました。職場見学会で障がい者が働く様子を見て、「自分もここで働きたい」と、翌日から自主的にミシンの練習にも取り組み始めました。

AARの支援開始後、7人の障がい者が訓練に参加しました。地元企業からはインターンや採用の打診も届き始めています。誰もが学び、働ける社会の実現に向けて、これからも活動を続けていきます。

プノンペン事務所

山本啓太



疾風にも折れない支援を

理事長 堀江 良彰



難民支援をはじめとする国際開発援助の現場は、いま深刻な危機を迎えています。

トランプ政権が発足して1年。米国は国際援助資金を大幅に削減し、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)やWFP(世界食糧計画)は資金の約4割を失いました。WHO(世界保健機関)への拠出金は全額停止され、米政府から直接、間接に支援を受けてきた団体の中には、活動停止に追い込まれる例も出ています。

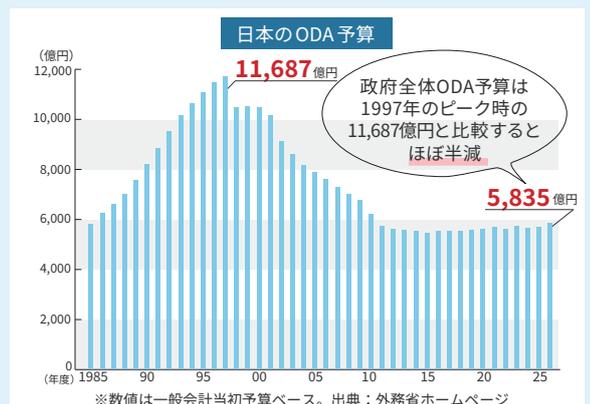
世界最大級のNGO「国境なき医師団」は、ソマリアで治療用ミルクの輸送が止まり、運営する病院に入院する重度栄養失調の子が3倍以上に増加した、コンゴ民主共和国でレイプ被害者向けの感染症予防薬入りキット10万個の発注が

取り消され、患者増加が懸念されている、などと報告しています。食料や水、医薬品の不足は、病气や貧困、児童労働につながり、それは若い人々の教育・就労機会を奪い、新たな貧困を生みます。その負担は世界中の難民に重くのしかかります。

日本のODA(政府開発援助)も1997年をピークに半減し、加えて世界的な物価高と円安の影響で資金はさらに目減りしています。

この厳しい環境だからこそ、NGOや市民の役割がより重要になっています。「疾風に勁草を知る」という言葉があります。強風が吹いた時に強い草が分かる、苦難の時に意志の強さが明らかになるという意味

です。外部からの支援がなくても人間らしく生きられるよう、AARは教育や就労支援など、自ら人生を切り拓くための支援に注力しています。たとえ一時的に支援が途絶えても、自らの力で歩みを進め、尊厳を持って生き抜いていく。それこそが、今求められている「折れない支援」による成果だと信じているからです。どうか引き続き、温かいご支援をお願いいたします。



緊急
支援カンボジア・タイ国境紛争
避難民へ物資配付・教育支援

避難生活を送るスンさんに話を聞くカンボジア駐在員の
荒井大地＝ポーサット州の避難所で2025年12月20日

タイとカンボジアの国境地帯では2025年12月初旬から軍事衝突が激化し、両国合わせて70万人以上が避難する事態となりました。カンボジア国内では、26年3月現在も多くの人が寺院や避難先の学校、仮設テントなどで不安な日々を過ごしています。「爆発音が聞こえる街から、友人の車に乗せてもらって避難してきました。ここでは屋外で寝ているので、夜は蚊に刺されて困っています」。タイとの国境

付近の自宅から、約120キロ離れたポーサット州の避難所に逃れてきたスン・キアンさん(47歳)は、AARの聞き取りに不安そうに話しました。

AARは12月初旬より、長年活動してきたカンボジアで国内避難民への緊急支援を開始。コクコン州やポーサット州の避難所となっている寺院や学校を訪問し、現地行政や住民と協力してニーズ調査を行ったうえで、水やコメ、食用油、非常食、衛生用品などの配付を行いました。また、屋外で生活する高齢者や子どもが多いことから、障がい者や高齢者、妊婦、乳児のいる世帯を優先してテントも配付しています。1月末までに、こうした支援を470世帯1902人に届けました。

さらに、ポーサット州の避難所に開設された子どもたちの教育施設の運営を補助し、小学1年生から6年生までの子ども22人が学んでいます。避難生活の長期化が懸念される中、AARは現地行政や現地NGOと連携しながら、避難民のニーズに応じた支援を続けていきます。

【中東危機緊急支援】レバノンで食料配付を開始

2月28日に米国・イスラエル軍によるイランへの攻撃が始まって以降、中東地域の情勢は急激に悪化しています。イスラエル軍は3月3日、隣国レバノンとの国境沿いの一部で地上侵攻を開始しました。レバノンの首都ベイルートに隣接する山岳レバノン県では、学校や公共施設を利用した189カ所の一時避難所に約2万8千人が身を寄せています。多くの避難所には調理設備がなく、約半数では十分な食事が確保できていません(3月6日時点)。

AARはこれまでもレバノンで協働してきた現地団体ShareQと連携し、避難所で生活する人々を対象に食料支援を開始しました。衛生的な食品工場で作られた、すぐに食べられる調理済みの食品を届けています。配付にあたっては、高齢者や障がいのある方、乳幼児連れの世帯など、特に配慮が必要な人々を優先しています。



食料を届ける協力団体のスタッフ

国内避難民となった人々の生活は厳しさを増しています。一人でも多くの命を守るため、緊急支援へのご協力をお願いいたします。

これまでのレバノンでの支援

AARは2006～2007年にベイルートに事務所を開設し、不発弾・地雷回避教育を実施。現在はレバノンの協力団体と連携し、2023年10月から続く国内の民兵組織ヒズボラとイスラエルの軍事衝突で国内避難民となった人々への支援を行っています。2024年10月以降、現地協力団体ShareQと連携し、ベイルートや山岳レバノン県などの福祉施設で約72,000食の食事を提供し、約2,500人を支えてきました*1。2026年2月中旬には現地協力団体Foodblessedと連携し、貧困率の高い北部アッカー県で障がいのある人や高齢者の世帯など特に困難な状況にある260世帯に、コメや豆、油などの食料を届けました*2。

*1この活動は、皆さまからのご寄付に加え、ジャパン・プラットフォームの助成を受けて実施しました。

*2この活動は、皆さまからのご寄付に加え、連合・愛のキャンパの助成を受けて実施しました。

●郵便振込・ゆうちょ銀行から
口座番号:00110-8-697924 加入者名:難民を助ける会
通信欄に「中東危機」とご記入のうえ、お振込みください。

●クレジットカード、コンビニ払い、銀行振り込みは
HPより手続きできます。右のQRコードをご利用
ください。



難民支援

ウクライナ人道危機4年 ミコライウ州などで支援



ミコライウ州で行った地雷回避教育

ロシアによる軍事侵攻から4年が経過したウクライナ。長引く戦争で国内は疲弊し、国連人道問題調整事務所（OCHA）によると、人道支援を必要とする人の数は2022年の290万人から、26年には1080万人に増えました。AARは協力団体と連携し、地雷対策や障がい者支援を続けています。ウクライナでは、住宅地や農地、学校の周辺などに地雷や不発弾が残されており、人々は常に「そこに爆発物があるかもしれない」という恐怖と隣り合わせで暮らしています。農作業に出る時や、子どもが外で遊ぶ時、避難先から

戻って久しぶりに自宅の庭に足を踏み入れる時も、その不安はつきまといま

す。AARは、危険地域で暮らす住民に向けて、爆発物の見分け方や安全な行動、発見時の通報方法など、命を守るための知識を伝える啓発セッションをこれまでに1579回実施し、6456人が参加しました。前線に近い地域では、人が集まることで攻撃の標的となる恐れがあり、障がい者や高齢者など移動が困難な人も多くいるため、一軒一軒の家庭を訪問するなどして柔軟に対応しました。

ミコライウ州では、障がい者や高齢者などへの医療支援も行っています。生まれつき股関節の形成が不完全なガリーナさん（64歳）は、砲撃で自宅が破壊され、その後はストレスによる高血圧や歯の痛みに悩まされてきました。AARは、ガリーナさんが歯科治療を受けられるよう支援し、血圧計を提供しました。ガリーナさんは、「この困難な時期を生き延びる機会を与えてくれ、心から感謝しています」と話しました。

スタッフ日記

「マラソン大国」のリフレッシュ法：ケニア

カクマ事務所 中川梨緒奈



AARが難民支援を行うケニアのカクマでは娯楽が少なく、生活が単調になりがちです。そのため、日々の暮らしの中で自分なりの楽しみを見つけることが大切です。

そのひとつがスポーツ。ケニアは世界のトップ選手を多く輩出するマラソン大国です。自室から事務所まで歩いて10秒という環境に住んでいる私は運動不足になりがちで、日々のランニングやウォーキングが欠かせません。仕事が終わると、現地スタッフや他の支援団体のスタッフと一緒に1時間半くらい、カクマタウンを通る幹線道路沿いをウォーキングをしたり、週末の早朝には走りに出かけたりします。

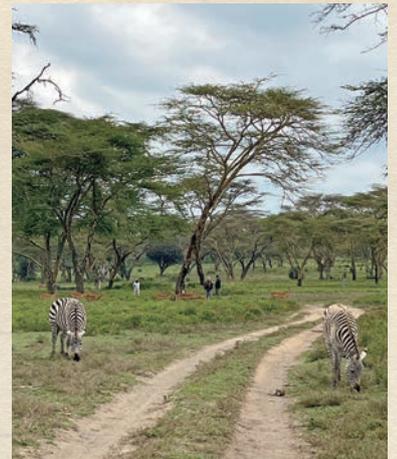
たまに出張で訪れるナイロビで走るのも楽しみのひとつ。一年中暑いカクマに比べると、標高1,700m前後のナイロビは涼しく、とても気持ちよく走れます。ランニングコミュニティや市民レースも多く、郊外では、野生動物を間近に見て走るトレイルランも楽しめます。こうした体験は、ケニアならではの魅力だと感じています。



ナイロビで市民レースに参加

マラソンの他に、卓球をすることもあります。仕事が終わると、手作りの卓球台を組み立てて現地スタッフと試合開始。私自身、卓球はそれほど苦手ではないと思っていましたが、彼らにはこれまで一度も勝てず、ケニアの人たちの身体能力の高さを実感します。

こうして体を動かす時間が心身をリフレッシュさせ、仕事の活力を生み出しています。



野生動物と出会うランニングコース

未来を変える薬と 誰もが健康な社会を作る

製薬大手、中外製薬株式会社（東京都中央区）は、社会とともに発展する「共有価値の創造」を経営方針とし、サステナビリティ（持続可能性）を重視した経営を掲げています。社会貢献や災害支援にも力を入れ、AARにも何度もご支援をいただいています。同社の原点と目指す未来について、矢野嘉行・上席執行役員（人事・ESG推進統括）に聞きました。

（聞き手：東京事務局 太田阿利佐）

原点は関東大震災

— 中外製薬は昨年創業100周年を迎えられました。

当社は独自のサイエンスと技術を強みとする研究開発型の製薬企業です。創業者・上野十蔵は、関東大震災の惨禍と医薬品不足を目の当たりにして、世の中のためになる薬を作りたいと考えました。1970年代には企業三原則として「社会性の追求」「人間性の追求」「経済性の追求」を打ち出し、1980年代には他社に先駆けて遺伝子組換え技術や細胞培養技術といったバイオテクノロジーによるバイオ医薬を中心に、さまざまなイノベーション（革新）を起こしてきました。

— 70年代の高度経済成長の最中から、人間性や社会性、今でいうESG（環境、社会、企業統治）重視の経営をされてきたのですね。

二代目社長・上野公夫の「人々の健康に貢献する」という強い意志を引き継ぎ、サステナビリティを事業活動の中心に据え、社会課題の解決をリードし、社会とともに発展することを目指しています。成長戦略「^{トップアイ}TOPI 2030」では、「患者中心の高度で持続可能な医療の実現」を掲げました。「患者中心の高度な医療」は、一人ひとりの患者さんにあった薬や治療法の開発、QOLと呼ばれる生活や人生の質を向上させていく医療を意味します。一方「持続可能

な医療」は、医療へのアクセスなどが大きなテーマになります。世界には未だ治療法がない病気に苦しむ人々、治療法があるけれど貧困や制度上の理由で必要な医療を受けられない方がいます。どんな国、どんな場所でも適切な医療が受けられる環境を作りたい。2002年から世界有数の製薬企業、スイスのロシュ社と戦略的アライアンスを組んでいるのもその一環です。

能登でボランティア活動も

— 中外製薬さんとのご縁は、東日本大震災被災者支援の社内販売会を開催していただいたから。最近では能登半島地震やミャンマー地震に多額の支援をいただきました。

能登半島地震後は、会社をあげて、ボランティア活動にも行き、石川県などが設立した能登官民連携復興センターに社員も派遣しています。最近も社内で能登の物産販売会を開きました。昨年11月、私も現地に行ったのですが、予想以上に復興が進んでいない印象



輪島市の白米千枚田で草取りを手伝う中外製薬の社員ボランティア＝2025年6月2日、同社提供

でした。AARさんの事務所にも伺い、能登に常駐してサポートを継続されている姿を目の当たりにして、とても共感し、本当に素晴らしいなと思えました。復興に向けては色々な形で被災者支援を続けていかなければならない。今後も私たちがお手伝いできることがあれば、と思っています。

サステナビリティは事業の中心

―御社は、子宮頸がん撲滅プロジェクトの推進のほか、障がい者スポーツ支援、在宅福祉移送車両の寄贈、使用電力の再生可能エネルギー化などサステナビリティや社会貢献に非常に力を入れています。開発研究に莫大な投資が必要な医薬品業界の中で、社会貢献に人々資金を割くのは大変ではないですか。

私どもは、経営の基本方針に「当社と社会の共有価値の創造」を掲げています。これまで病気によって日常生活に不安や制約を感じていた患者さんが、新薬によって治癒したり、日常生活の質が向上していく。我々は新薬やサービスを提供することで社会に貢献し、そうして生まれた治療薬が患者さんや家族を幸せにする、これが「当社と社会の共有価値」です。

共有価値創出の源泉は、人財資本、技術・知的財産などの知的資本、ロジックも含めて外部の方と協力する社会関係資本、そして環境・エネルギーなどの自然資本です。ですからサステナビリティを事業活動の中心に置き、地球環境、人権、社会貢献などに積極的に取り組んでいます。そのための軸の一つはCo-creation(共創)。私たちが目指す価値観や方向性に共感するパートナーと社会課題を解決することです。AARさんはそのパートナーとして捉えています。

AARと共通する理念

―経営目標の中に「社会との共生」がしっかり組み込まれているんですね。AARをパートナーとしていただいた理由は何でしょうか？

これまで接点を持つなかで、AARの基本的な考え方、人間の尊厳を大切にし、一人ひとりが自分らしく生きて活躍できる、そういう共生社会を重視されている点に共感しました。日本発のNGOとして「困った時はお互いさま」の気持ちを大切にされていますが、これはまさに当社が原則としてきた「社会性」だと思っています。

私たちも人々の健康に貢献することを企業理念としていますし、社会貢献のありかたとして、健やかな一人ひとりのための医療、誰もが健やかに自分らしく暮らせるための社会、次世代の育成の3点を基本としています。AARさんの考え方と共通点が多いと考えています。



中外製薬協賛で開催された、能登半島地震の外国人被災者同士の交流会＝七尾市で2025年11月23日

アジアの途上国に保健医療を
―今後、特に注力していきたい社会貢献の分野はありますか？

国連が定めた「持続可能な開発目標(SDGs)」は「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」を掲げています。中外製薬も、このグローバルヘルスにおける社会課題、すなわち保健医療へのアクセス向上にむけて取り組んでいきたい。当社は今年、101年目という新しい一歩を踏み出します。次の百年を担う次世代育成、その土台となる健やかな社会にバトンを繋いでいけるよう、災害支援を含めて持続可能な社会づくりに継続的に貢献していきたいと思っています。特にアジア等の発展途上国における保健医療へのアクセス、災害で困難に直面している方への支援は、継続していきたいと考えています。

―最近、自国第一主義の風潮もあります。御社のような、企業の価値創出と、社会課題の解決への貢献の両立に挑む企業は他に出てくるでしょうか。出てくると思います。私たちもそういう企業と一緒に、また負けないように、もっともっと貢献できることをやっていこうかなという思いでいます。

まるごとプロジェクト募金 2026 募集のご案内

AARが世界各地で実施する活動の資金を一括でご支援いただく「まるごとプロジェクト募金2026」。2025年度は、春と秋に募集した7つのプロジェクトに温かいご支援を賜りました。国際支援そのものが縮小・停滞する今、困難な立場にある人々を取り残さないために、今年度は7つのプロジェクトへのご寄付を募ります。詳しい支援内容は、同封のパンフレットまたはホームページをご覧ください。お電話でもご説明いたします。ご遠慮なくお問合せください。ご検討いただけますよう、心よりお願い申し上げます。



支援内容はホームページからもご覧いただけます

お問い合わせ

AAR 東京事務局 桐生、平井
TEL : 03-5423-4511
E-mail : info@aarjapan.gr.jp

通常総会のご案内

2025年度の活動報告・決算、および2026年度の事業計画・予算などについて報告・決議を行う通常総会を6月27日(土) 午後13:30～15:00に開催いたします。議決権のある正会員の皆さまには、改めてご案内をお送りいたします。

【日時】2026年6月27日(土) 13:30～15:00

【場所】AAR Japan 東京事務局6階交流スペース

連続セミナー「ゼロからの終活」 第2回は相続税のお話です



第2回は、目黒区を拠点にオーナー企業の税務・事業承継から個人の相続税・不動産税務まで幅広く手がける税理士・後藤勇輝先生をお招きします。相続税の基礎知識から、知っておきたい税金対策まで、わかりやすくご解説いただけます。詳細はホームページまたは同封チラシをご覧ください。

お申し込み・詳細はこちら

【日時】2026年6月11日(木)

10:30～12:30

【場所】AAR Japan 東京事務局

6階交流スペース

【定員】20名(先着順)



冬募金キャンペーンへの 温かなご支援ありがとうございます

11月にお送りした冬募金のお願いに、のべ1,720人の皆さまより2,561万3,543円のご寄付をいただきました。温かいご支援に心より御礼申し上げます。難民の女性や子どもたちの希望を守る支援活動などに大切に活用いたします。



ロヒンギャ難民の女性と子どもを対象とした啓発プログラム

相次ぐ自然災害へのご支援

2025年3月に発生したミャンマー地震の緊急支援に、多くの個人と企業・団体の皆さまからご寄付をお寄せいただいています。個人情報に配慮し、50万円以上をお寄せいただいた企業・団体のみをご紹介します。

ミャンマー地震緊急支援
きょうされん

(2025年11月16日～2026年2月28日)

チャリティチョコレート ご好評につき完売いたしました

「美味しくて、支援につながる」とご好評をいただいているAARのチャリティチョコレートは、約1万箱をお買い上げいただき、おかげさまで2月末で完売いたしました。ご協力に心より御礼申し上げます。純益はAARが世界各地で実施する支援活動に活用させていただきます。今年度は商品をリニューアルし、11月頃の販売開始を予定しています。

YouTubeにて「AARのお茶の間」配信中！

活動地のことやスタッフの想いなどを、現場で活躍する駐在員から直接お伝えしたい。お茶を片手に気軽に聞いてほしい。そんな想いから始まった「AARのお茶の間」。これまでにミャンマー、バングラデシュ、ザンビアなどの活動地について、現地の“いま”をお届けしてきました。最新回ではケニアを取り上げ、AARが行う教育支援や難民キャンプで暮らす女性たちが抱える課題についてお伝えしています。AARのYouTubeチャンネルにて、ぜひご視聴ください。



書き損じハガキ・切手キャンペーン 引き続きのお願い

4月30日まで
受付中

書き損じや未使用の年賀状・官製ハガキ、未使用の切手を集めるキャンペーンに、約1万6,311枚の切手・ハガキが寄せられています（3月15日時点）。心より感謝申し上げます。目標の6万枚には、まだ約4万5,000枚が必要です。皆さまのお力をお貸しいただけますよう、よろしくごお願い申し上げます。

募集期間：2026年4月30日まで

【集めているもの】

- ① 書き損じた年賀状・官製ハガキ
- ② 未使用の年賀状・官製ハガキ
- ③ 未使用の切手 ④ 未使用のテレホンカード

送付先：〒141-0021 東京都品川区上大崎2-12-2
ミズホビル7F AAR Japan 物品募集係

東日本大震災から15年 シンポジウムを開催

AARは3月5日、シンポジウム「あの日から15年 東日本大震災の教訓を未来へつなげる」を開催し、会場・オンライン合わせて約150人の皆さんにご参加いただきました。

AAR常任理事の水鳥真美（東北大学特任教授（客員）経営本部戦略アドバイザー）が、国連防災機関のトップとして培った経験をもとにした基調講演を行い、「東日本大震災の教訓から、誰一人取り残さない防災が国際的な原則となった」と述べました。また、障がいのある人や高齢者、外国人など、災害時に支援が届きにくいとされる人々と平時からつながりを築く重要性を指摘しました。続いて、日本障害フォーラム（JDF）政策委員の赤松英知さんは、災害時の障がいのある人への支援の歩みを振り返り、「支援には長期的な体制が不可欠であり、官民が連携して取り組むことが重要」と訴えました。

AARからは、東北事務所長を務めた野際紗綾子が東日本大震災後15年間の支援経験をもとに、「障がいのある人も当事者として支援の担い手となり得る」と報告。能登半島地震の支援を担当する生田目充は、障がいのある人への住居・移動支援に課題が残る現状を報告し、解決に向けた取り組みを地域へ引き継ぐ必要性を指摘しました。



水鳥真美AAR常任理事／日本障害フォーラム（JDF）政策委員
赤松英知さん



「これからの災害支援と防災」をテーマとしたパネルディスカッション

パネルディスカッションでは、「災害時の国際的な支援に対する日本の受け入れ体制について」「福祉作業事業所の職員を取り巻く環境や課題は改善されているのか」などの質問が寄せられました。災害時でも人権が守られるインクルーシブな社会を目指し、行政・市民が連携して防災と支援体制を強化していく必要性を共有しました。

AARは引き続き、東日本大震災の教訓をもとに、誰も取り残さない防災と復興を目指して、被災者支援を継続してまいります。



支援事業部
三木 将 MIKI Masaru

our staff | スタッフ紹介

原点は「世界への好奇心」

熊本市出身で、AAR11年目の三木将さん。
広報部、海外駐在員、支援事業部と、アフリカを
中心に多様な現場を経験してきました。

—国際協力の道を志した原点を教えてください。

幼い頃から地理が好きで、海外への関心がありました。幼稚園の時には世界地図を描いたり、地球儀を親にねだったりしていました。知らない土地や言葉、文化への好奇心が強く、高校生の頃には、すべての国境線を描いた世界地図を描けるようになっていました。



幼い頃にもって買った地球儀と、当時描いた世界地図

—それはものすごい特技ですね。

国境線には、その国の歴史的背景が表れているんですよ。例えば、エジプトとスーダンの間には両国共に領有権を主張しない珍しい地域がありますし、ナミビアには、盲腸のように細く突き出た国境もあります。

—その興味は、どのように進路選択につながったのですか。

大阪外国語大学（現・大阪大学）でスワヒリ語を専攻しました。高校の途中までは医学部志望だったのですが、自分が本当に興味を持っているのは地理や言語だと思います。外語大への進学を決めました。当時、海外経験は修学旅行で中国に行った程度で、アフリカについてほとんど

知りませんでした。しかし、「全然知らないことこそ学びたい」と思い、日本ではメジャーな言語ではないスワヒリ語を専攻しました。ほかにもヨルバ語（ナイジェリア南西部）、ハウサ語（ナイジェリア北東部、ニジェール南部）、ズールー語（南アフリカ）、チャガ語（タンザニア・キリマンジャロ周辺）、などアフリカ各地の言語にも触れました。現在もケニアの事業地で、現地の方とスワヒリ語で会話するととても喜んでもらえ、関係作りに役立っています。

—AARでの経験の中で、特に印象に残っている出来事は？

さまざまな部署を経験しましたが、特に印象深いのは2018年～19年のザンビア駐在です。当時、私が赴任する前から、一定の役割を果たしたルサカ事務所を閉鎖することが決まっており、駐在終盤はその業務に携わりました。20年以上続いた歴史ある事務所で、長年勤めてきた現地職員もいました。閉鎖はスタッフの気持ちの整理も伴う大変なプロセスでした。最後に皆で食事会を開いたとき、それぞれの思いがあふれ、私も胸がいっぱいになりました。その時の同僚とは今もつながっていて、人生の財産となりました。

—三木さんにとってAARで働く魅力とは何ですか。

何事も自分から能動的に動かなければ前に進まない仕事であるところが魅力ですね。また、旅行では訪れることのない国や地域に行き、その土地の文化や人々の暮らしを肌で感じられることも、この仕事の面白さです。

編集部より

AARの支援を受けて職業訓練や研修に励む障がい者の表情は、どの国においても輝いて見えます。新たなことに挑戦して得られる自信は、訓練による最大の成果とも言えます。身に付けた技能とともに、これからの人生を支える糧となります。

AAR News

2026 Spring NO.494

次号は2026年7月上旬にお届け予定です。

特定非営利活動法人 **難民を助ける会**

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズビル7F

Tel.03-5423-4511 Fax.03-5423-4450

<https://aarjapan.gr.jp/>



AAR Japan